

## 山岳信仰の起源

富士山世界遺産登録を記念して

安田 喜憲

はじめに

めでたく立木教夫先生が麗澤大学比較文明文化研究センター長にられました。伊東俊太郎先生が創設されました比較文明文化研究センターを、きら星のように、優秀な方が担っていかれることと本当に素晴らしいことだと思います。日本の中で比較文明文化研究センターというのは、この麗澤大学にしかありません。私もこの客員教授にさせていただいて、ずっと勤務させていただいております。お祝い申し上げます。

一 富士山を世界文化遺産に

二〇一三年六月に富士山が世界文化遺産になりました。富士山を世界遺産にすることは、日本人にとっての悲願でございました。ユネスコの下部機構にイコモス（ICOMOS）がございました、そのイコモスが世界遺産にするかどうかを、最終決定いたします。イコモスから視察もまいりました。その最終結論が二〇一三年四月三〇日に来ました。「富士山の山岳信仰をピルグリム・ルート（巡礼路）」として、世界文化遺産に推薦するが、条件がある。三保松原はピルグリム・ルートから四五キロメートルも離れているので、富士山を世界文化遺産にしたいのなら、三保

松原を構成資産から外すことだ」と言ってきたのです。

畏友の川勝平太氏が静岡県知事をしております。私は世界遺産推進室担当参与という肩書をいただいで、週一回静岡に行き富士山を世界遺産にすることにかかわってまいりました。

四月三〇日の勧告でイコモスは、「三保松原を構成資産から外すことが世界文化遺産にする条件だ」と言ってきた。「富士山が世界文化遺産にほぼなるのだから、三保松原を外してもいいじゃないですか」という意見も出てきた。私は、「それはあかん」。三保松原と富士山は一体だ。川勝知事も「やつと八合目まで来たけれども、あと残り二合がある。残りの二合は、三保松原を世界遺産にすることだ」とおっしゃっていました。

三保松原に降り立ち水浴びをした天女は富士山の化身です。富士山の化身が三保松原に来て、水浴びをして、また富士山へ帰っていく。富士山と三保松原は、命の水の循環で繋がっている。森里海の水の循環は、われわれ稲作漁撈民にとって生命の維持装置の根幹を形成している。富士山に降った雪が地下にしみこみ、地下水となってこんこんと麓に溢れ出る。その美しい水が水田を潤し、その水田を潤した水が海へ流れて行って、プランクトンを育て魚を育てる。その魚介類を主たるタンパク源とするライフスタイルを稲作漁撈民は確立しました。

駿河湾は日本一深い内湾です。最大水深二五〇〇メートルにも達します。二五〇〇メートルも水深のある深海底には珍しいサメが生息している。かたや富士山は三七七六メートルの日本一高い山です。日本一深い駿河湾と日本一高い富士山が近接して存在する。富士山頂と駿河湾の最深部の落差は、六〇〇〇メートル以上もあります。しかも、近接した距離で一直線につながっている。エベレストの標高は八八四八メートル以上ありますが、インド洋のベンガル湾から山麓のインド平原を通ってエベレストまで達するのに、直線距離で七〇〇キロメートル近くあるわけです。ところが、日本の駿河湾から、富士山の頂上まで、ほぼ直線で三〇キロメートルにも満たない。そんな所は、世界広しと言えどもない。そこには深海底に生息するサメから始まって高山に生える高山植物に至るまで、素晴らしい生物の多様性が維持されている。それをつないでいるのは、命の水の循環系なのです(図1)。

この森里海の水の循環系を守り生物多様性を守るということが、稲作漁撈民の世界観の大事なことであって、これをヨーロッパの畑作牧畜民の人々にも知ってもらわなきゃいけない。ところが、イコモスは「三保松原はビルグリム・ルートから四五キロメートルも離れている。富士山を世界遺産にしたいのなら三保松原



図1 富士山と三保松原のある駿河湾は命の水の循環で繋がり、富士山頂と駿河湾の深海底は比高 6000メートル以上もある生物多様性に満ち溢れた急崖なのだ(撮影 大野剛)



図2 アンコールワットやアンコールトムの環濠には飲めるくらいのきれいな水が 12 世紀の段階ではたええられていた(撮影 安田喜憲)



図3 2007年のアンコールトムの環濠の学術調査(撮影 安田喜憲)

をはずせ」と言ってきたのです。

第三七回のユネスコの最終決定会議がカンボジアのプノンペンで行われることになった。カンボジアでのクメール文明の調査結果については、麗澤大学モラロジー研究所での講演（稲作漁撈文明が地球と人類を救う」モラロジー研究 六〇（二〇〇七年）でお話しさせていただきました。しかも第三七回のユネスコの会議の議長は、ソクアン副首相だと書いてある。二〇〇六年にカン

ボジアに行ったところは、カンボジアはまだ貧しくて、私はソクアン副首相の家に遊びに行ったこともあり。義弟のテチュップさんは環境省副大臣で、友だちになっていただいた。

しかもカンボジアのプンスナイ遺跡を発掘調査する時の私たちのカウンタートパートは、チュップン文化芸術省副大臣だった。そのチュップン閣下も世界遺産を担当しておられた。プレアビヒアという、タイとの国境でアンコールワットに匹敵するような大き

な遺跡がありますが、それが「タイの遺跡だ、いやカンボジアの遺跡」だと両国が争っていて、その担当者がチュップン文化芸術省副大臣でした。

それで、私は早速、お二人に手紙を書いた。「アンコールワット(図2)という世界遺産は、アンコールワットの東側にプノンバケンという山の神様を祀ったところです。そのアンコールワットの隣にアンコールトムという一二世紀の段階で、恐らく世界一の人口を有していたと思われる大きな都市遺跡があります。そのアンコールトムに住んでいた王様は、一年に一回は必ず、プノンバケン山の岩山と清水の出てくる場所に巡礼に行ったのです」と。

アンコールトムとアンコールワットの周囲には、環濠があります。二〇〇七年にその環濠を調査しました(図3)。当時一二世紀の段階で、世界一人口が多かったと推定されるアンコールトムの環濠は、おそらくものすごく汚れているだろうと思っていました。ところが、環濠の中に堆積した土の中の珪藻と昆虫の化石を分析した森勇一先生は、「安田先生、この水は飲めますよ」と言っただけです。一二世紀の段階で世界一の人口を擁した都市の環濠の水が飲めるぐらいにきれいだった。その水はどこから来ているか。それは聖なるプノンバケン山から来ているわけです。つま

り、アンコールトムとアンコールワットは、プノンバケン山と聖なる水によってつながっていた。しかもその水は飲めるぐらいにきれいな水として、環濠にたたえられていた。

これには私もびっくりしました。実際、アンコールトムの場合は、三つ大きな貯水地を作っています。上澄みだけを環濠に流して、汚い物を全部、その湖の貯水池の底にためる濾過システムを作っていたのです。

「世界遺産のアンコールワットとプノンバケン山の関係は、三保松原と富士山の関係とまったく同じなんです。富士山と三保松原が命の水の循環によってつながっているのと同じように、プノンバケン山とアンコールワットもアンコールトムも、命の水の循環によってつながっていたわけです。これが稲作漁撈民の世界観なのです。」と私は手紙を書きました。

白アリの巣がポコリ・ポコリとカンボジアの平原にはあります。白アリの巣が、家の中にできたら、日本人はすぐ壊すでしょう。カンボジアの人は絶対に壊さない。何故かと言うと、白アリの巣は、山の恰好をしているわけです。だから、それは家の中に山ができた。つまり、聖なる水を生み出す山ができたわけですから、幸福がやって来るとカンボジアの人々は考えるのです。カンボジアの人々が山を崇拜する気持ちは、日本人以上に強い。それ

が稲作漁撈民の考えなのです。

西洋の一神教の国の人々が、ピルグリム・ルートから四五キロも離れているから、三保松原は世界遺産にしない。「富士山を世界遺産にしたければ、この三保松原を除外するのが条件だ」と言ってきた。「これは、東洋と西洋の闘いだ」と私は思ったわけです。二回目にソクアン副首相とチュップン副大臣に手紙を書きました時には、Yasuda, Y. (ed.): *Water Civilization* (Springer, 2012) という本にもそのこと書いていますので、その本もお送りしまして「四二八ページを見てください、そこに聖なる水のこと、カンボジアのこと書いてあります」と記しました。チュップン副大臣は、すぐにソクアン副首相の所にその手紙と本を届けてくださったそうです。

## 二 世界の人々が日本人の山と水を崇拜する世界観を認めた

ブノンベンの世界遺産の会議には、世界各国からユネスコの大使が来ていました。カンボジアのユネスコ大使は、二〇〇七年のアンコールトムの環濠の調査の時のカウンターパートだったロス・ボラート博士でした。会場には一五〇〇人以上の人がいまし

た。元文部科学大臣の遠山敦子先生も来ておられて「どこかの大使が、三保松原は素晴らしいと言ってくれるといいんだけどな」と言っておられた。その時に頑張ったのが文化庁長官だった近藤誠一氏です。近藤長官が、各国の大使にいろいろネゴシエーションされた。私にはそんな資格ありませんから、大使に直接訴えることはできませんけれども、長官は、日本国の代表ですから交渉された。

そして、六月二一日の夜一九時から各国の大使のパーティーがあった。それが終わった直後、近藤長官のお顔が輝いていた。その瞬間に、「これはひよつとしたら明日はうまくいくかもしれないな」と私は思いました。

そして、六月二二日午後二時三〇分から富士山の世界遺産の審議が始まった。まずおどろいたのは私たちは当初「富士山・信仰の対象と芸術の源泉」という副題をつけてユネスコに申請していました。しかし、途中で信仰の対象という言葉が一神教の国々から反発されるのではないか、行政は宗教とは分離しなければならぬなどという危惧が起こってきて、ユネスコには「富士山」とだけ申請していた。ところが、各国の大使は、その副題を復活すべきだと言ってくれたのです。これはうれしかった。山を崇拜し信仰する稲作漁撈民の世界観が世界に認められた瞬間でした。

ユネスコの会議では、ドイツとフランスがヨーロッパでは大きな力を持っています。フランス語は英語と共に公用語になっています。そのドイツの大使が「三保松原は素晴らしい、これは世界遺産にすべきだ」と言ったのです。そして、メキシコの大使も「そうだそうだ」と各国の大使が三保松原と富士山を口々に絶賛しはじめたのです。マレーシアの大使は女性の大使でしたが、涙ながらに言ったわけです。インドの大使は、「水を崇拜するスピリチュアルな世界観こそが大事だ」とまで言った。世界の人々がここまで一生懸命支援してくれるのかと思うと、ちよつと目頭が熱くなりました。川勝平太知事は「不思議な勢いの風がみなぎった」（『日本は富士の国』環 五五 藤原書店 二〇一三年）と書いておられるが、私は富士山の神々がその時だけ来られたのではないかと思つた。そして、最後にソクアン副首相が「アダプティッド」と言つて木槌をたたかれて決まつたんです。

決まつた瞬間に、私の前に遠山敦子先生が座つておられたが、全然立たれないわけです。体の調子でも悪いのかなと思つて、ちらつと見たら、泣いておられた。それぐらい、静岡の人は富士山を崇敬しておられるのです。

### 三 三保松原を愛したエレヌ・ジユクラリス

静岡の人は奥ゆかしい。何故、奥ゆかしいかと言うと、三保松原にあこがれたエレヌ・ジユクラリス氏というフランスのダンサーがいた。エレヌ氏は一九一六年に生まれ、羽衣の能にあこがれて、謡曲「羽衣」を翻訳し、一九四九年にギメ美術館で能「羽衣」を上演し、絶賛をほくしました。羽衣の舞はその後も絶賛をあげたのですが、一九四九年六月にエレヌ氏は天女が羽衣の舞を舞いながら消えていく最後の場面で倒れ、白血病になつて、一九五一年に三五歳の若さで亡くなつてしまつたのです。「せめて一度、三保松原をおとすりたい。」これが彼女の夢だつたけれども、白血病に倒れその夢をかなえることはできなかつた。夫のマルセル・ジユクラリス氏は、一九五一年に彼女の遺髪を持つて三保松原を訪れた。そしてその遺髪を三保松原に埋めた。それを聞いた清水市（現在は合併して静岡市になつた）の人々が寄付を集めて記念碑「エレヌ夫人羽衣の碑」を一九五二年に建てた。一九五二年と言えば第二次世界大戦の敗戦後間もないころです。日本は貧困のどん底にあつた。なのに、そのフランス人の行為に感動した清水市の人々は、寄付を集めて記念碑を作つたのです。

私はその話を富士山が世界文化遺産になってから聞いたんです。「何でもっと早く言わないの」と。そのことを知ったらフランス人なんか、諸手を挙げて、三保松原を世界文化遺産に推挙したでしょう。それはまさにフランスと日本の友好のシンボルです。これからエレヌ氏の記念碑を、日仏の友好のシンボルにしたいと思います。

静岡県の職員の名刺には、富士山が印刷してあるわけです。私は世界遺産推進担当参与という名刺をいただいて、それをみんなに配っています。富士山が世界遺産になるまでは、それをみんなも、「フーン」というようなもので誰も相手にしてくれない。ところが、富士山が世界文化遺産になってからこの名刺をあげるのと、「ありがとうございます」と、みんなから言われるようになりました。

三保松原は世界遺産の構成資産からいったん落ち、それが復活した。落ちたことによって、人々の関心が高まり、清掃活動が始まった。二〇一三年五月の連休の時なんかには、清掃をするために五〇〇〇人ちかい人が来たんですから。あのままスツと世界遺産になってしまったら、そんなことは起こらなかったでしょう。いったん落ちたものだから、みんなの間に「保全しなきゃいけない」という気持ちが出てきたのです。

#### 四 三保松原のマツを守れるか

三保松原のマツを守るといことが、これからの重要な課題です。今は静岡市が管理している。静岡市はマツを守るために農薬まいて、農薬を樹幹注入している。樹幹注入と言うのは注射器のようなものがマツの幹に刺してあるでしょう、その中には農薬が入っている。農薬が効かないというのはもうだれしもが経験から分かっている。二五年間、西日本からずっと農薬をまき続けたのに、青森までほとんどのマツが枯れてしまったのですから。唯一、太平洋岸の三保松原、あるいは信州の一部とか、東北の内陸の一部とかにはまだ残っています、しかし海岸のマツはほとんど枯れてしまった。特に日本海側のマツはほとんど枯れてしまった。これは中国からやってきた大気汚染が原因です。それによつて日本海側のマツは青森までほとんど枯れてしまったのです。

それでも、農薬をまき続けています。やり始めてから二五年たっているんだから、五年もたったなら「大体これは効かないな」と分かるはずですが。でもやめない。何故、やめないか。それはまず、林野庁はそれをやめると、国から来る予算が減る。そして地方の人は地方の人で、松枯対策のお金は国から来るのですから、自分のところの財政が痛むわけではない。おまけにマツは何も言

いませんから、効かないことが分かっていてもやり続ける。

枯れた松を倒す伐倒作業があります。伐倒作業にも何十万円というお金がかかるわけです。それは、もう公共事業になって、失業対策事業になっているわけです。自分のところの県とか市のお金が痛むわけじゃない。国からお金がある。マツは何も言わない。枯れていけばどんどんと失対、公共事業ができる。いまさら「今まで二五年間まき続けてきた農薬が効きませんでした」とは言えない。誰かの首が飛びますね。だから、効かないことが分かっているけど、二五年間ずっとやり続けているんです。体に悪い農薬を撒き続けているわけです。

静岡市の担当者に「この農薬まいていくけど、松枯れに効くと思いますか」と聞いた。そしたら、若い担当者は正直だった。「いや効かないと思います」と言った。ところが、上司が何と云ったと思いますか。そこにいた上司は「いやそんなことはない。農薬の濃度を三分の一に薄めているから効かないんだ」と言ったんです。「人体に悪いから、濃度を三分の一に薄めている。だから効かないんだ」と。

昔の樹木医さんは、木の命を守るということで、一生懸命働いた。ところが、樹木医さんは今、林務部の人の再就職先になっている。林務部の人が六〇歳で退職した後、行くところがないか

ら、樹木医さんになるしかない。公共事業と一緒に、松枯れ対策で来るお金をいかに分けるかというような方向に行っている。

例えば、岡山県で樹齢三〇〇年のマツの巨木が枯れ始めた。それを、樹木医さんが一本修理するのに七〇〇万円かけている。ところが七〇〇万円かけて、結局、全部、枯らしているわけです。その原因は「マツクイムシだからしかたがない」という。

私たちは今、三保の松原を助けるためには、イービーエス産興という広島の小さな会社が開発した「松イキイキ」という漢方薬を根っこに注入して、土壌を改良してマツを助ける運動を展開しています。なぜマツノサイセンチュウがはびこるかと言うと、これはマツの免疫力がなくなってきたて幹がカサカサになりマツヤニが出なくなる。すると、そこへマツノマダラカミキリが卵を産むわけです。それで、マツノサイセンチュウが発生して、マツが枯れていくわけです。マツヤニが出ていけば、カミキリムシは卵を産めないんです。マツが弱るのは、まず大気汚染が原因だけれども、マツを元気にするのは、根っこを元気にしなきゃいけない。

陸前高田の奇跡の一本松は保存に一億円近いお金がかかっていますが、私は保存の状況を見た瞬間に、「あ、これは枯れる」と思いました。何故、枯れると思ったかというのと、根っこの周りに矢板を打って大切な根っこを切っていたからです。マツの命にと

って一番重要な根っここの周りを矢板で囲って根を痛めてはもう助からない。

ともかく三保松原のマツは年間二〇〇〇本近くも枯れているのです。このままほっておけば三〇年たったら六万本近いマツが枯れ、三保松原は消滅します。静岡市は私の強い申し出に応じて対策区をもうけて一年間、農薬を使う従来のやり方と、イービーエス産興の漢方薬を使うやり方の比較実験を行いました。その結果、農薬を使った地区は一八四本のマツが枯れたのたいし、松イキイキの漢方薬を施工した地区は一本枯れただけでした。結果の違いは歴然としているのに、静岡市はほかにもやり方があるからあと五年かけて対策を考えるという。五年の間に一万本近いマツが枯れるのですよ。

驚いたのは、市や県の林務部の担当者は、三保松原のマツは五万四〇〇〇本あるとこれまで説明してきました。実際、日本ボーイスカウト連盟や地域の人々約四〇〇〇人が一本一本数えたら、三万六九九本しかなかった。二万本以上もさばをよんでいたのです。これには川勝平太知事も「何というずさんさか」と怒っていました。さっそく三保松原を保全する対策会議を立ち上げることになりました。

一度、三保松原を訪れて下さい。鳥の声・虫の声をほとんど聞

くことができせん。それは沈黙の世界です。ネオニコチノイド系農薬がミツバチの神経系統を壊し、ミツバチが激減している原因ではないかと指摘されるようになりました。ヨーロッパではこのネオニコチノイド系の農薬の使用は制限されたのに、日本では今、もつとも多く使用されているのです。(その農薬を静岡市は二〇一四年五月二七日と六月二四日の二回、三保松原の上に空中散布することを決定しました。)

##### 五 命の水への信仰を大切にしたい

先ほど申し上げましたように富士山への信仰は、命の水への信仰だということです。これを忘れないでほしい。私たちの生きざまは、森里海、山と平野と海、これが命の水の循環でつながっていることによって支えられているということです。これが、私たち稲作漁撈民にとつての生命の維持装置なんです。

ヨーロッパは、森を全部破壊しています。イギリスの高い山の上に行つて、清水がこんこんと出ていますが、「そんなもの全部家畜の糞で汚染されていますから飲んだらいかん」と言われるでしょう。でも、日本だったら山の中へ入つていつてきれいな水が湧いていれば、いくらでも飲むことができます。それは、日本人

が、森里海の水の循環系を大切にしていたからです。

式年遷宮は二〇年に一回ずつやる。二〇年前に立てたお社と同じものをそっくりそのまま二〇年後に建てなおすわけです(図4)。二〇一三年はその御遷宮の年にあたっていました。私は三重県の出身ですから、若いころに「なぜ二〇年前と同じことやらなければいけないのか」と思っていました。もっと大きなもの建てたらいいじゃないか。どんどん右肩上がりで行ったらいいのに、どうして三重県の人は二〇年前と同じものを作り続けるのかと思っていました。「だから、三重県人は駄目だ」とさえ思っていました。

式年遷宮は天武天皇がお命じになって、持統天皇が実際やられたわけですけれども。二〇年というのは一世代です。おじいさんがやったら次は子ども、子どもがやったら次は孫、二〇年に一回ずつ同じことを繰り返すことができるということは、いかに素晴らしいことかということです。二〇年に一回ずつ同じことを繰り返すためには、美しい自然、美しい大地が維持されていなければなりません。神殿を作るための木材もきちんと維持されていなきゃいけない。それがあって初めて遷宮はできるのです。

今回、福島原子力発電所の事故がありました。その、大罪は何か。それは、原子力発電所の事故によって、おじいさんが耕

した水田、お父さんが漁をした海でもう当分の間、少なくとも、一〇〇年、二〇〇年の間は、農業や漁業ができないまでに大地を汚染し、水を汚染してしまったということです。日本人は、自然に対して詫びなきゃいけない。

二〇年に一回ずつ同じ事を繰り返すということがいかに素晴らしいことか。このことを福島原子力発電所の事故を体験して多くの日本人が知ったのです。

美しい地球の中で千年も万年も生き続けるということ、そこに最大の価値を稲作漁撈民は置いてきたのです。自分が生きている間に森を全部食いつぶして、金もうけして大きな家を建てることのできたかもしれないけど、大地を砂漠に変えて、大地の豊かさを全部搾取してしまつて、子孫にツケだけを残す社会、それが欧米で出てきた畑作牧畜型の社会です。

図5は、静岡県にあります大鹿窪という一万三〇〇〇年前から一万一〇〇〇年前の縄文時代草創期の遺跡です。この遺跡に行つて驚きました。実は私が立っている所が、ちょうど広場のある所なんです。竪穴住居は馬蹄形に配列し、富士山が見える所だけ竪穴住居がないんです。だから一万年以上前から、縄文人は富士山を仰ぎ見ていたということです。

八戸市の風張遺跡という縄文時代後期の遺跡から出た、祈る



図5 縄文時代草創期の静岡県大鹿窪遺跡の人々も富士山を仰ぎ見していた（撮影 大野剛）



図4 式年遷宮でにぎわう伊勢神宮（2013年11月撮影 安田喜憲）



図6 静岡県富士宮市富士山浅間大社（撮影 安田喜憲）



図7 浅間大社の湧玉池（撮影 安田喜憲）

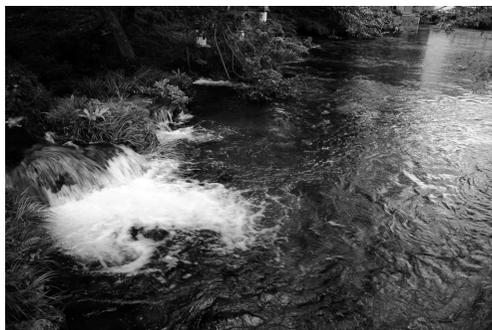


図8 柿田川の清流 (撮影 安田喜憲)

縄文の土偶(安田喜憲編『文明の原理を問う』麗澤大学出版会二〇一一年)は何を祈っているか。それは地球と生命に祈っているわけです。大地に祈り、山に祈り、生命に祈っている。

静岡県富士宮市に富士山浅間大社(図6)がございますけれども、富士山に登拝する時には湧玉池で、水垢離をするわけですが、きれいな水が湧いております。これは富士山の伏流水です。その

シンボルが柿田川という川です。この柿田川(図8)には美しい湧水がこんこんとあふれ出ている。この水は今でも、三島市などの水道水に使っている。ですから山を崇拝することは聖なる水を崇拝することなのです。

#### 六 山を崇拝した環太平洋の人々

富士山を崇拝するのと同じような世界観を持った人々は、環太平洋にも暮らしています。環太平洋は地震の巣窟です。何故、地震が起こるか。それは、プレートの運動によって地震が起こり土地が隆起し、山ができるから起こるわけです。だから、その地帯、環太平洋造山帯に生きる人々は、山を崇拝する世界観を持っているわけです。

その一つ、コロンビアのティエラデンドロという世界遺産をご紹介します。コロンビアはこれまで、テロが多くて滅多に行けなかったのですが、最近治安もよくなりました。ティエラデンドロの世界遺産センターは谷底にある。ところが世界遺産になっているのは谷底から一〇〇〇メートルぐらい高い山に登っていった尾根の所にある墓なのです。どうしてこんな高い山に登って、お墓を作ったんだろうと思いました。実はここまで登って初めて、



図10 マヤ文明の緑の玉の仮面をつけた王の遺体 (撮影 安田喜憲)



図9 世界遺産コロンビアのティエラデンドロ遺跡 (撮影 安田喜憲)

富士山と同じような円錐形の山が見えるわけですが(図9)。だから、この高い山の頂にお墓を作ったのではないか。

しかも、もっと驚いたのはお墓の中です。彼らは蛇を崇拝しており、供献土器には蛇が描いてあります。蛇の頭、かま首そして、とぐろを巻いた蛇が描かれています。世界遺産になっているお墓の中には、三角形の模様が描いてあるわけです。この三角形の模様は一体、何か。

実は、日本の福島県のいわき市にある古墳の壁画に描いてある三角形の模様も、台湾のパイワン族が崇拝している百歩蛇という蛇のシンボルも三角形なんです。

鋸歯状紋と日本の考古学者は呼んでいます。三角形の模様は卑弥呼が贈られたという三角縁神獣鏡に彫金されていますし、中国雲南省の李家山遺跡という日本の弥生時代とほぼ同じ時代の遺跡から出土した青銅器にも彫金されているし、ミャオ族の銅鼓にも彫金されている。実は三角形というのは蛇のシンボルなんです。

環太平洋の山を崇拝する人間は、竜ではなくて蛇を崇拝した。二匹の蛇が絡み合っているのは注連縄の原型だと最初に指摘されたのは吉野裕子氏(『吉野裕子著作集 全一二巻』人文書院二〇〇七・二〇〇八年)です。皆さんが神社でお参りされる注連縄というのは、二匹のオスとメスの蛇が交尾をしているところで

す。蛇が交尾をする時には、注連縄のような絡まり合いをするわけです。

もちろん言うまでもなく、メキシコのアズテックの人々は蛇を崇拜しました。蛇こそが最も偉大な神であった。つまり環太平洋には、共通した蛇を崇拜する世界観があったということです。今、申し上げた、縄文人も蛇を崇拜しました。

さらに、マヤ文明のティカル遺跡のピラミッドは、山のシンボルだった。マヤ文明の人々も山を崇拜したわけです。われわれが富士山を崇拜するのと同じように、マヤの人々も山を崇拜した。

長江文明は稲作漁撈民の文明で、畑作牧畜民の黄河文明とは違います。長江流域の稲作漁撈民は玉を大事にしました。金銀財宝じゃなく、玉を大事にした。その玉の中で最もくらいが高く祭祀に使用されたとみなされる玉琮の両側には、直線や浮彫がほどこされ、硬い玉に彫刻がなされていると同時に、玉琮は必ず丸と四角の結合からなっているわけです。中国の『天文訓』の中で「丸は天、四角は大地である」と述べています。玉琮は天と地の結合を意味しているわけです。

山を崇拜する環太平洋の人々もまた、玉を崇拜していました。日本の縄文人も、言うまでもなく、玉を崇拜しておりました。ニュージーランドのマオリの人々も緑色の玉を崇拜するんです。そ

れから、マヤの人々もちゃんと緑色の玉を崇拜する。長江の馬王堆のミイラと同じように、顔を玉で覆うこともおこなっていました(図10)。緑というのは命の色なんです。だから緑の玉を崇拜する。

そうした玉は、私達が明らかにしてきたように(梅原猛・安田喜憲『長江文明の探究』新思索社 二〇〇四年)、まさに山のシンボルだった。山を崇拜した人は蛇を崇拜すると同時に玉を崇拜した。

その山を崇拜するということは、天地の結合を崇拜するということでした。山は天と地を結合する岩の梯子なのです。

玉琮の側面に彫られた浮彫の直径は三センチぐらいの小さなものですが、羽飾りを付けたシャーマンがトラの目に触っているわけです。足を見たら鳥の足なんです。実は山を崇拜し、蛇を崇拜し、玉を崇拜する人々は、鳥を崇拜するんです。アメリカンインディアンも同じです。アメリカンインディアンは、玉琮に彫られた羽飾りの帽子を付けたシャーマンの帽子と同じです。それは鳥を崇拜しているシンボルです。アメリカンインディアンが鳥を崇拜したのと同じように、中南米のマヤ文明やアンデス文明の人々もケツァールコアトルの羽飾りの帽子をしているわけです。

鳥は天地を往来し、柱も天地を結合しているわけです。台湾にも、ルカイ族とか、パイワン族らの少数民族は、羽飾りの帽子を付けて踊っている。ルカイ族の女性も、美しい羽飾りの帽子を作って、アメリカンディアンと同じようにかぶっている。伊勢神宮の心の御柱、熱田神宮の五柱というように、日本の神道は柱を崇拜しますけれども、これもやっぱり天地の結合を崇拜するということです。マヤの人々は、セイバという木を崇拜した。アメリカンディアンも鳥を崇拜し柱を崇拜する。

山や柱は天地を結合するが、鳥も天地を往来する。中国の長江流域のミャオ族は村の広場には、かならずフウの木で作った蘆笮柱を立てるんですけども、その柱の上には、鳥が東を向いて太陽が昇る方向にちゃんと向いている。同じように諏訪大社の御柱祭り、日本人も伊勢神宮の心の御柱をはじめ、柱を大事にします。

熊野神社の八咫鳥というのは長江から来たわけですけども、八咫鳥は太陽の黒点だった。長江の人々は八咫鳥が太陽を運んでいると考えた。中南米の人々も、太陽を崇拜した。メキシコのテオティワカン遺跡にある太陽のピラミッドは、エジプトのピラミッドに匹敵する巨大なピラミッドです。長江の人々も、中南米の人々も太陽を崇拜した。先ほど申し上げたミャオ族の銅鼓には必

ず太陽紋が彫金されているわけです。稲作漁撈民は太陽を崇拜したわけですけども、ジャガイモを作ってトウモロコシを栽培している人々も、やはり太陽を崇拜した。

大事なことは、環太平洋地域にはもともとヒツジやヤギの家畜がいなかったということです。これを私はミルクのない文明 (Milkless Civilization) だ (Flenley, J. and Yasuda, Y.: Environmental variability and human adaptation in the Pacific Rim and the Sustainability of the Islands. *Quaternary International*, 184, 1-3, 2008) と呼んでいます。ヒツジやヤギがいらないんです。ですから乳を飲まない。もちろん、ヤクやアルパカはいますから、時には肉は食べます。でも彼らは、バターやチーズを作らないのです。環太平洋の人々は山を崇拜し、蛇を崇拜し、鳥を崇拜し、柱を崇拜し、玉を崇拜し、太陽を崇拜する。そういう世界観を持った人々は、家畜のヒツジやヤギを飼わないということです。ヒツジやヤギは、一五世紀以降、アメリカ大陸にスペイン人たちが持ち込んだものです。それ以前は、ヒツジやヤギはアメリカ大陸にはいなかった。中南米の人々の主要なタンパク質はやっぱり魚介類なんです。だから、魚介類を食べることが精神世界を決定する上で、何か意味があるんじゃないかと、今の私は考えておられます。



図11 グアテマラ、ティカル遺跡のアクロポリスの模型（撮影 安田喜憲）

長江文明、クメール文明、あるいはマオリの人々とアンデス文明や、あるいはマヤ文明には共通した世界観があります。それを私は、「環太平洋の生命文明圏」という名前で呼んでいます（安田喜憲『生命文明の世紀へ』第三文明社 二〇〇八年）。それは、今までの黄河文明やメソポタミア文明、インダス文明、エジプト文明とは違う文明の原理を有した文明です。一五世紀にスペイン人がやって来て、マヤ文明、アンデス文明が滅ぼされる以前に

は、環太平洋には共通の命を崇拝する生命文明があったというのが私の考えでございます。

## 七 環太平洋の人々も生命の水の循環を大切にしたい

環太平洋の人々が大切にしたいのが、命の水の循環なんです。図11はグアテマラのティカル遺跡の模型ですけども、ティカルに暮らした人々は、水の循環的利用を行っていた。王様が暮らす地域のピラミッドには漆喰が塗られていて、降った雨は表面を伝って王様の暮らす所にある貯水池にためられます。その水は次の貴族たちが使う所に運ばれていくわけです。さらにその後の水は、一番下の農民がいる所に運ばれていって、その水で灌漑をするシステムになっていました。この地域は、雨季はたくさん雨が降るんですけど、乾季はほとんど雨が降らない。雨季に降った雨をこの貯水池にためて、そして乾季を乗り切るわけです。その時に、この循環的な水の利用というのをやっているわけです。

既に述べましたように、マヤ文明のピラミッドも山のシンボルでした。山への信仰というのは、水への信仰だったということですから。それが、環太平洋に極めて特色的に分布している。環太平洋では、水への崇拜が山への信仰というものと深く関わっていた。



図12 コロンビアのグアタビータ湖 (撮影 安田喜憲)

山を崇拝し、そこから流れてくる水を崇拝し、命の水の循環系を大事にする。それが環太平洋の人々の命の生命の維持装置になっている。それはかつて環太平洋に共通して存在したわけだ。

## 八 大地に謝罪する時

図12は、コロンビアの首都ボゴタの郊外にあるグアタビータ湖

です。二〇一二年の二月に私はコロンビアを訪れました。首都のボゴタは海拔二六〇〇メートルの高地にあり、赤道直下なのに予想外に涼しかった。日本の秋に似たこちよい気候だった。そんな秋晴れのなか、私はボゴタ郊外のグアタビータ湖に向かいました。

グアタビータ湖は山(男)と水(女)の交わるところで、インディヘナの人々にとっては精神世界のシンボルだった。そこは母なる大地母神を崇拝する聖地でした。

この湖でムイスカ文明の王は、即位の儀礼を行ったのです。王になる人は、太陽が登る前に、この湖にやって来て、フライホンと呼ばれる植物の樹液を体に塗り、体中に金粉をまぶし、金の装飾を身につけて、朝日の昇る直前に湖に漕ぎ出したのです。

そして朝日が昇るとともに、王は湖に入り、体につけた金粉を洗い流すとともに、身につけた金の装飾品を湖底に投げ入れる。太鼓が鳴り音楽が奏でられ、湖にはさらにエメラルドや金の装飾品が投げ込まれる。こうして若者はカシーケと呼ばれる王になることができたのです。

インディヘナの人々にとっては、金を集め、大地と天に奉納することは、贖罪の意味がありました。ムイスカの人々の間では、次のような伝説が語られていた。「あるときムイスカの若者が太

陽に向かつて矢を射た、その矢は強力で、矢は太陽にささった。そのため太陽から哀しみの金の涙がこぼれおちた。以来人間には災いが起こり、嫉妬や欲望が生まれた。」

ムイスカの人々はこの災いを避け、欲望を亡くし、贖罪のために、太陽の涙である金を集め、湖に返し沈めてきたのです。人々にとって重要なものは金よりも、太陽であり、大地の安寧だったのです。

インディヘナの人々は地球のすばらしさを実感していました。この美しい地球と千年も万年も生き続けることが最高の幸福だったからです。だから母なる大地の神に祈りをささげ、太陽への感謝を忘れなかつたのです。この美しい大地の贈り物である生命の輝きと繁栄のために金をささげ祈ったのです。

ところがあるとき、ムイスカに金の虜になったスペイン人がやってきました。スペイン人の欲望はすさまじく、一六世紀にエルナン・ペレス・デ・ケサーダは、湖の水を一部抜くことに成功し、金を手に入れました。以来、一九世紀にも二〇世紀に入っても、水を抜くことに多くの人々が挑戦しました。最後には、湖岸の低くなった部分にダイナマイトを仕掛けるという方法をつかって排水し、金を取るうとさえたのです。

金中心の世界を構築したのは、金融資本主義であり、それを発

展させたのは近代ヨーロッパ人でした。しかし、そこに人類の不幸があったのです。お金が生命以上の価値を持つようになってしまった。

この美しい大地と風の香りやささやき、おだやかな生命を輝かせる陽射し、鳥の声や葉ずれの音。それらは幾千幾万のお金をつみかさねても得られないものであることを忘れてしまった。

この命の輝きのなかで人間も生きる。それが最高の幸福であることをムイスカの人々は知っていました。それはまさに、アニミズムの世界に生きた縄文人の造形感覚とまったく同じでした。縄文人も中南米のインディヘナの人々も、お金よりも大切なものがあることを知っていたのです。

福島原子力発電所の事故が、もしもお金に目がくらんだ人々による危機に対する技術的対応の未熟さといった人災の側面をもつたものであったとしたら、私たちは一万年前の縄文人や、ムイスカの人々に、その生き方を学ばなければならないのではないのでしょうか。

私たちは、放射能で汚染してしまった大地と海と大気に謝罪し、罪滅ぼしをしなければなりません。そうでなければ、その報いをあなたではなく、あなたの子どもや孫・曾孫たちが受けることになるのです。